

消えゆく言語伝えたい

キャンパス

「ティンリン語」を研究の東京女子大・大角教授

絶滅の危機にあるのは野生生物だけではなく、世界には五千から六千種の言語があるとされるが、少数の話者しかいない言語が大半で、多くが「消滅」の危機にさらされている。そうした「危機に瀕した言語」に関する緊急調査研究プロジェクトに、文部省もこの九月から研究費補助を出すことになった。南太平洋の仏領ニューカレドニアに残る「ティンリン語」を記述した、東京女子大言語文化学科教授の大角翠さん(きょく)も、中断していた研究を近く再開させる。



大角翠教授

大角教授のゼミには先週、琉球語(ウチナーグチ)を話す男性が沖縄県糸満市から招かれた。初めて聞く言語の話し手から、どのよう

に言葉を見つけていくか。「みんな耳をすまして」。ウチナーグチで自己紹介が始まると、聞き取れない学生たちはあつけないで、先住民居留区に足を踏み入れたものの、日本語の「ナ」と「ニ」をくっつけ

「書き取られることで誇りを取り戻す古老」 近く研究を再開



ニューカレドニアの先住民居留区で、かこを編む女性たち/写真提供・大角翠教授

たような音ばかりで、「ニヤニヤニヤニヤ」としか聞こえない。ボウフラの浮いた水や、コウモリの料理に面喰らいもした。「未知の言語だからやってみたい」。覚悟して乗り込んだが、泣きだした。

「週間ほどたつて、「もう分かんないや」と聞き直った時に、ようやく音の遠いが分かった。

目や耳など、体の呼び方を身ぶり手ぶりをまじえて聞くことから始め、仮説を立てながら、音韻の組み合わせを探りあてていく。寝食を共にして三カ月。音韻

体系と、動詞が最初に来て主語が最後にくる基本的構文が分かってくれた。

その後も四回は現地で暮らし、八九年には、博士論文で「ティンリン文法」をまとめた。それをもとに書き上げた文法書が九五年にハワイで出版された。

母音数は十四、子音数三十。日本語にない時制の表し方がたくさんある。所有を表す言葉も、日本語なら、「だれその物」と助詞の「の」だけで済ませられるが、ティンリン語だと、所有される物の性質や所有の目的で、言い回しが非常に複雑に変わる。

「言語は単なるコミュニケーション手段なのではなく、外界を認知する重要な眼鏡。思考は、母語である言語と切り離せない。言語が消えるということは、その民族が過去から現在まで背負ってきた伝統や文化、思想など、重要な部分を失うということなんです」と大角さんは指摘する。

言語を記述したからといって、ただちに「消滅」をくい止められるとは思っていない。ただ、「書き取られることで、ティンリン語を話してくれたおじいさんは、自分たちの言語の豊かさに初めて気づき、文化や伝統に誇りを取り戻してくれた。それが何よりもうれしい」と話している。